

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 12 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530553

研究課題名（和文） 「公害」を伝えるメディアとしての「語り部」の役割と今後

研究課題名（英文） The Current and Future Role of "Kataribe"
as Media in Environmental Disaster Discourse

研究代表者

池田 理知子（IKEDA RICHIKO）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50276440

研究成果の概要（和文）：自分にとっての水俣病とは何かを考え抜いたうえで語りかける「語り部」の存在は、狭義の当事者ではない者が「当事者性」を獲得していくための示唆を与えてくれる。自分と水俣病との関わりに真摯に向き合うことにより、水俣病を語り継いでいく道が開かれ得ることを示しているといえる。また、語り部補助員との対話形式で語る語り部の講話を通して、その場がもつ規範の力の具体的な姿が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The issue of "tojisha-sei" or persons/parties concerned forms the central focus of my present research. Through the analysis of "Kataribe," or narrators of Minamata, who try to understand what "Minamata disease" means to them, all persons can be the narrators, if they reflect on what it means to themselves and confront it sincerely. Furthermore, the power which makes a "Kataribe" a stereotypical image of fetal Minamata disease patients dominates some sessions of the dialogue-type talk with assistants.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：コミュニケーション学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：コミュニケーション、メディア

1. 研究開始当初の背景

「語り部」というとまず戦争や被爆体験を語る人たちのことが想起されることが多い。従って、「語り部」に関する研究というところから戦争体験などにそれまでは集中していたのが実情であった。恒久平和の実現のために過去の体験を語り継ぐという役割や機能を彼女／彼らがいかに遂行しているのか、あるいは遂行していくのが考察の中心を

なしており、特に平和研究および教育といった文脈の中でそうした研究が進められてきた。ところが、同じ「語り部」であっても、今回考察の対象とした「公害」被害を伝える「語り部」に関する研究は、それまであまりなされてこなかった。環境教育が近年盛んになるという状況にあるなかで、環境保全の重要性を説くという役目も担っているこうした「語り部」の意味を再考することは、今日

的な意義を有すると考え、本研究を行うこととした。

また、近年のメディア研究は、SNSや携帯といったいわゆるニュー・メディアと呼ばれるものに集中する傾向があり、口承メディアへの関心が相対的に低い状況にあった。そうした現状のなかで、あえて「語り部」をメディアとしてとらえ、口承メディアのもつ現代的な意味を問い直すことも本研究の射程内であった。

そうした背景のもとに、多大な被害をもたらした熊本と新潟の水俣病の「語り部」に焦点を当て、その実態と役割の考察を具体的に進めていくこととなったのである。「語り部」の高齢化に伴い、誰が何を語るのかを模索することで、水俣病をはじめとした公害の記憶をこれからもつないでいくことが可能となるはずだという思いがあった。

2. 研究の目的

「語り部」をメディアとしてとらえたとき、彼女／彼らが何をどのように伝えているのか、それによってオーディエンスと共にどのような場を作り出すことが可能となるのかを探り出すことが、本研究の目的であった。具体的な研究課題は次のようなものとした。

(1) 熊本と新潟の水俣病被害を伝える「語り部」に焦点を当て、「博物館／資料館」という不特定多数を前にして話す場において、そこでどういった関係を彼女／彼らがオーディエンスと結び得るのか。

(2) 「語り部」の高齢化が問題となっている現状を鑑みて、「公害」は誰によってどのように今後語り継がれる可能性があるのか。

本研究は、「負の遺産」がどのように「記憶」され、「記録」されるのかを考察する研究の一端を担っていると考えられる。「公害」という文脈で、具体的にそれを検証していくことが、本研究の目的であったといえる。

3. 研究の方法

研究方法は、主に以下の二つに集約される。

(1) 文献の整理・分析

① 口承メディアにおけるこれまでの理論および研究の整理を行った。口承メディアのもつ意味を歴史・文化的文脈で説明しようと試みた理論家である、ジャン・グブサーやウォルター・オング、マーシャル・マクルーハンなどの精読・再分析を行い、こうした理論の検証を通して、具体的に口承メディアが果たす役割や機能の今日的意味を整理・分析した。

② 戦争や被爆体験がこれまでどのように語

られてきたのかを調べると同時に、そうした語りに関する理論的研究を精査した。特に、成田龍一や屋嘉比収、米山リサらの誰がどのようにそれを語り継いでいけるのかといった問題、つまり「当事者性」に関する研究は、本研究を進めるうえで多大な示唆を与えてくれた。

③ 水俣病および新潟水俣病に関する全般的な文献調査も行った。「語り部」に関する研究は、慶田勝彦のある「語り部」が語っている状況を分析したもの以外なかったが、今回の研究を行うに当たって、水俣病に関する歴史やこれまでの研究の流れを知るうえで有用であった。また、関連する様々なドキュメンタリー映画やテレビ・ドキュメンタリー、テレビ・ニュースなどを視聴したことも、歴史的背景を知り、研究の幅を広げるためには欠かせない方法であったことを付け加えておく。

(2) 熊本と新潟の水俣病資料館でのフィールド・ワーク。

① 「水俣市立水俣病資料館」

「語り部」の講話への参与観察を行った。当初は、11人の「語り部」（「語り部」として登録されているのは13人だが、様々な事情で2人は活動休止状態である）の講話すべてに、機会がある度に参加していたが、次第に分析対象を絞り込んでいった。一つには、比較的若い世代（40代後半から50代前半のいわゆる水俣病第二世代）の「語り部」で、自分にとっての水俣病とは何かを考え抜いたうえで語りかけているように思えた語り手たちの講話を中心に、参与観察を行った。その一方、語り部補助員との対話形式で行われる「語り部」の講話が気になり始め、研究の後半からはこちらの参与観察も集中して行うようになった。

参与観察と同時に、「語り部」へのインタビュー調査も行った。さらに、資料館の職員や語り部補助員への聞き取り調査も併せて行った。

② 「新潟県立環境と人間のふれあい館—新潟水俣病資料館—」

「水俣市立水俣病資料館」と同様、「語り部」の講話への参与観察および「語り部」へのインタビュー調査、資料館職員への聞き取り調査を行った。水俣と違う点は、講話の数が圧倒的に少ないことであった。その数の少なさを補うために、資料館で行われる講話だけでなく、新潟水俣病共闘会議が主催した「現地調査」の際の「語り部」とのラウンド・テーブルなどにも参加し、「語り部」の話聞くことを心掛けた。

上記以外に、戦争や被爆体験を語り伝えることとの比較のために、沖縄や広島、長崎の戦争や被ばくに関する資料館での調査も行った。沖縄のひめゆり祈念資料館や佐喜真美術館、長崎と広島の前爆資料館の様々な語り手の活動を知ることは、本研究を進めるうえで大いに参考になったことを記しておく。

また、四日市公害を伝える活動を行っている市民グループ「四日市再生『公害市民塾』」の「語り部」活動の参与観察や、彼女／彼らへのインタビュー調査を実施した。さらに、イタイイタイ病や西淀川大気汚染を伝える活動を行っている人たちへのインタビュー調査も行った。これらの調査を通して得た知見は、本研究との比較という観点から、貴重な示唆を与えてくれた。

4. 研究成果

3年間の本研究の成果は下記のとおりである。

(1) 自らの体験を伝える「語り部」は、忘れ去られようとする過去を我々の前に提示するが、それは単なる「過去」ではない。「過去」に起こった出来事の現在の話である。語られる話は、過去の「事実」に対する現在の解釈だし、その「事実」が単に過去のものだとは言いきれない。我々はそうした過去を含めた現在、そして未来を、「語り部」が語ってくれることにより共有することができるのである。語られる言葉は、単なる「事実」ではなく、「語り部」の「思い」であり、〈語る／語られる場〉を共有することによって、その「思い」が伝わる。

(2) 高齢化する「語り部」の問題を考えると、誰が水俣病／水俣病事件を伝えるのか、誰が「語り部」になり得るのか、という課題に向き合わざるを得ない。狭義の「当事者」にこだわるのではなく、「当事者性」という観点から、今後どのように水俣病／水俣病事件が「記憶」され、「記録」されるのかを考える必要がある。しかし、水俣市立水俣病資料館における「語り部」と「語り部補」という2つのカテゴリーの存在は、「語り部」を狭義の当事者のみにとどめようとする意識を反映している。資料館関係者のみならず、オーディエンスの意識、つまり「当事者」の話の聞きたいとか、「本物の患者」の姿を見たいという気持ちが強く存在することが、この区分を生み出したものと考えられる。

(3) 「当事者性」の問題を具体的に検証していくために、患者家族の立場で話す「語り部」に焦点を当て、彼女／彼らが講話の場でどういった語りをするのか、またオーディエ

ンスとどのような関係を結んでいるのかを記録・分析することを中心に研究を進め、かつインタビュー調査で彼女／彼らが講話の場をどのように考えているのかなどを尋ねて得られた回答と照らし合わせ、検証を行った結果、次のようなことが明らかになった。

①自分にとっての水俣病とは何かを考え抜いたうえで語りかける姿勢が、そうした「語り部」の講話のなかで見られた。水俣病との関わりを避け続けていた自分を振り返ることで、語ることを決意した自分のなかで起きた変化が何を意味するのかを語る「語り部」の存在は、狭義の当事者ではない者が「当事者性」を獲得していくためには何が必要なかを示唆している。自分と水俣病との関わりに真摯に向き合うことにより、水俣病を語り継いでいく道が開かれ得ることを示しているのである。

②水俣病史のなかで忘れ去られたかのような存在である公式確認以前に亡くなった水俣病患者たちとの関係性を探ろうとする「語り部」の語りから、戦争の「記憶」と「記録」に関する研究を進めている歴史学者の成田龍一がいうところの、公式な記録から抜け落ちた人びと、つまり「歴史」から排除されていた人の声に耳を傾けようとする「記憶」の時代を見据えた語りの実践が行われていることが確認された。この点も、狭義の当事者ではない者が「当事者性」を獲得していくためには、「歴史」とどう向き合うのか、誰から何を学ぶのかを考えざるを得ないのだ、ということを示唆している。

(4) 「当事者性」の問題をさらに考察するために、水俣病／水俣病事件以外の文脈における語り伝える行為との比較・対照によって、下記のことが見えてきた。

①四日市公害を伝える活動を行っている民間グループの「四日市再生『公害市民塾』」のメンバーが、定期的な勉強会や、市との協力のもとに「語り部養成講座」などを開催している。そうした地道な努力のなかから、若い世代のメンバーが、「患者」への聞き取り調査を実施したり、連続講座を開始したりと、活動を継続することの重要性を強調し始めた。これは、沖縄戦および占領について当事者とともに学びなおすことで「当事者性」獲得への道が開かれるとする屋嘉比収の理論を実証する事象であり、「記憶」の継承がこうした具体的な形で行われ得ることを示している。

②沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」と「佐

喜眞美術館」での語りの実践は、誰がどのようにに戦争や公害の「記憶」をつないでいけるのかの問題点と可能性を提示している。「ひめゆり平和祈念資料館」での「証言者」と「説明員」という語り手の違いがもたらす語りの差は、こういった形で次世代が語っていくのがよいのか、次世代が語れることは何なのかという課題を浮き彫りにしてくれた。沖縄戦を直接体験していない「佐喜眞美術館」館長である佐喜眞道夫の『沖縄戦の図』を前にして語る姿は、沖縄戦のことを語り継ごうとする次世代への可能性を示してくれている。また、絵画というメディアを通して語ることが何を意味するのかというさらなる研究課題も提示されている。

③ 2011年3月11日に起こった福島第一原子力発電所の問題以降、この事故と水俣病事件が比較・対照されるようになった。これまで原発の問題がどのように伝えられ、今後誰が何を伝えていくのかが問題とされざるを得なくなるはずである。こうした課題が見えてきたことも、今回の研究成果だといえる。

(5) 語り部補助員との対話形式による語り部の講話から、新たな視点を得ることができた。こうした形式をとるのは、胎児性および小児性水俣病患者が「語り部」のときであり、あらかじめ作成されたシナリオにそって一問一答式でその講話は進められる。それは、彼女／彼らを典型的な水俣病患者として表象させようとするものであり、彼女／彼らを規制された枠組みのなかで語らせているように思える。ただし、対話形式をとっているため、語り部補助を担当する者によって、表象される患者像が異なり、ある語り部補助員との対話では規範に収まりきれない講話の場が生まれている。そのように語り語られる関係性のなかに、ステレオタイプな水俣病ではない、多様な水俣病が、様々な語り手によって語られ得る可能性を見出せた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 池田理知子、田仲康博、シンポジウム「時代を聞く——戦争、公害、原発」が投げかけた課題、日本研究のフロンティア、査読なし、2012、57-62
- ② 池田理知子、「体験」を越えて語り継ぐことの可能性——水俣病の「語り部」を通して考える「当事者性」、日本研究のフロン

ティア、査読なし、2011、25-35

- ③ 池田理知子、メディア・リテラシーと「当事者性」、スピーチ・コミュニケーション教育、査読なし、24巻、2011、51-60
- ④ 池田理知子、語ること、そして「伝わる」もの——「水俣」が教えてくれるコミュニケーション教育の可能性、スピーチ・コミュニケーション教育、査読なし、23巻、2010、73-83

[学会発表] (計7件)

- ① 池田理知子、「沈黙が問いかけるもの」日本コミュニケーション学会第12回東北支部研究大会、みなとぴあ、新潟市、2011年12月3日
- ② 池田理知子、「四日市・水俣をつなぐもの——“語りつぐ”ことの大切さを考える」四日市公害訴訟判決39周年・市民集会、四日市本町プラザ、四日市市、2011年7月25日
- ③ 池田理知子、「作り出される場——沖縄戦の語り部を通して考える『水俣』」第41回日本コミュニケーション学会年次大会、西南学院大学、福岡市、2011年6月18日
- ④ 池田理知子、「四日市の現状を通して考える「語り」の可能性」水俣病資料館語り部の会主催、水俣市立水俣病資料館、水俣市、2010年11月20日
- ⑤ 池田理知子、水俣病の「語り部」を通して考える「当事者性」、日本コミュニケーション学会第11回東北支部研究大会、岩手大学、盛岡市、2010年10月31日
- ⑥ 池田理知子、「語り部」と当事者性、日本コミュニケーション学会第16回九州支部大会、放送大学鹿児島学習センター、鹿児島市、2009年10月11日

[図書] (計4件)

- ① 池田理知子、田仲康博、「時代を聞く——戦争、公害、原発」、せりか書房、2012、印刷中
- ② 池田理知子、メディア・リテラシー——公害／環境問題から読み解く、ナカニシヤ出版、2012、印刷中
- ③ 板場良久、池田理知子、よくわかるコミュニケーション学、ミネルヴァ書房、2011、34-37. 40-41. 44-45. 54-57. 144-145. 148-149

- ④ 池田理知子、よくわかる異文化コミュニケーション、ミネルヴァ書房、2010、86-87. 110-115

〔その他〕（計1件）

ホームページ等

<http://yokkaichi-kougai.www2.jp/images/stories/sakakura/2012/39ikedagenkou.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 理知子 (IKEDA RICHIKO)
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：50276440

(2) 研究分担者

川内 規会 (KAWAUCHI KIE)
青森県立保健大学・健康科学部・講師
研究者番号：30315335

(3) 連携研究者

なし